

## 学校における自殺予防（3） —教師を目指す学生の思うこと—

山梨大学大学院総合研究部教育学域 川本 静香

### 1. はじめに

学校でいかに自殺予防対策を導入し、勧めることができるのだろうか。こうした問いから、これまでの2回は、学校の中で自殺予防対策（とりわけ自殺予防教育）を導入する必要性や、受け皿となる学校側（現役教師）の声、学校での導入に際して、どういった形がありえるのかということについて議論を進めてきた。理論的に見いだせる可能性や、導入のための工夫について述べてきたが、こうして原稿を書くたびに、子どもの自殺死亡率が横ばいという現実と、学校で自殺予防対策を推進するという理念と、日々さまざまなことが起こる学校現場の「現場感覚」のそれぞれの間にある、ある種の距離感を埋めることの困難さを痛切に感じるばかりである。

さて、私事で恐縮だが、今春、立命館大学から山梨大学に異動した。異動先の山梨大学では教育学部の所属（正しくは、教育学部附属教育実践総合センター）となり、これから教師を目指す学生や現職の先生と、授業や研修会等で関わるようになった。私の主な担当は、教育相談や学校臨床であり、そうした授業を担当させてもらっている。着任してまだ2ヶ月足らずだが、未来の教師たちを前に何ができるのか、

日々模索しているところである。そうした職場環境が変わったことが理由のすべてではないが、学校で自殺予防対策を導入、実施する上で、その前段階にある、いわばブレ教師とも言える教育学部の学生が、若年層の自殺・自死の問題についてどのように捉えているのかを把握する必要があるように思われた。

教育学部の学生の多くは、教師になることを目指して（あるいは検討して）、関連科目の履修や、教育実習に日々励んでいる。そう遠くない未来、どこかの学校現場で、教壇に立つであろう彼らが、子どもの自殺・自死の問題についてどのように考えているのかは、それこそ、学校における自殺予防対策を推進する上で、非常に重要なポイントになると思われる。

そこで、筆者が担当する授業の「メンタルヘルス」に関わる内容の際に、自由記述によるアンケート形式で自殺・自死の問題についてどのような考えを持っているのかを尋ね、検討することとした。

### 2. 教師を目指す大学生の自殺・自死に関する考え

教師を志望している学生に対して、「死にたい」という人に対してどのようなイメ

ージを持つか、そして、「死にたい」という人に対して自分ならどのような対応をするか、という2つの質問について、自由記述での回答を求めた。

まず、「死にたい」という人に対してどのようなイメージがあるか、という問いに対して、一定数みられた意見としては、

「どこまで本気かわからない、本心がわからない」というものである。日常生活の中で、死にたいという言葉は、その意図するところが判然としないまでも、会話の中にある程度の頻度で登場する。そのため、「死にたい」と口にした人がどこまで本気なのかを測りかねるというのである。また、これと似たような意見として、「とりあえず口に出しているだけ」や、「かまっていほしいのでは」といった意見が見られた。

その他の意見としては、「問題があるなら、そこ（死）に行くまでになぜ他の方法をとらないのか。」「解決手段として愚か」という考えも見受けられた。一方で、「苦しそう」、「メンタルがやられている」「病院に行ったほうがいい」という意見も見られたが、これらに類する回答は全体の2割弱といったところである。

「死にたい」と言う人に対してあなたならどのように対応するか、という質問については、こちらは多くの学生が「話を聞く」と回答していた。とりわけ、「なぜそのように思ったのか」という理由を尋ねると記載した人が大半であった。一方で、少数であったが、「死ぬことが本人の救いに

なる場合があるので、何もしない」という回答や、「正直、どうしたらいいのかわからない」、「簡単に生きろというのは違うと思う」という回答も見られた。

以上、簡単に自由記述アンケートの内容について紹介した。詳細な分析等については、また別の機会にと思うが、自殺・自死に追い込まれる人に対して、ある種の偏った見方が存在しているような印象を受けた。つまり、「死にたい」と口に出す人の中には本気でない人が含まれている、という考えである。こうした考えの背景に、どのような要因が存在するのかについては詳細な検討を行う必要があるが、こうした考えが根付いているとすれば、「死にたい」という一言は、ある種の疑いを伴って聞き手に届けられ、決してSOSというようには受け取ってもらえない可能性がある、ということである。

自殺予防対策におけるゲートキーパーの養成においては、「死にたい」という声は、「死にたいほどつらい」ということであり、本人のSOSであるため、驚いたり、過剰な反応をしたりせずに、その気持ちを傾聴することが重要であるとしている（厚生労働省、2013）。こうしたゲートキーパー養成のための資料を見ると、「死にたい」という声に対する疑いのまなざしがあることはあまり想定されていないように思われる。しかしながら、今回学生に実施した実アンケートからは、本心なのかかわからない、かまっていほしいだけ、口にだしているだけ、といった、いわばパフォーマンス

ンスとして言っているだけなのでは？という疑いのまなざしの存在が確認された。これは、自傷行為に対する周囲の認識と似ているように思える。自傷行為に対して松本（2012）は、「繰り返される自傷行為を、「誰かの気を引くために」行われる、いわば人騒がせな演技的・操作的行為と思っ込んでいる援助者は意外に多い」と指摘する。自傷行為に付随しているこうした偏向した考えは、もしかすると「死にたい」と口にする人に対しても同様の構造を見出すことができるのではないだろうか。そしてそこには、自傷行為と「死にたい」と口にすること、そしてその先にある自殺・自死が同一線上にあり、自傷行為と「死にたい」と口に出すことは、おおよそ近い位置関係にあるというイメージが、内在化されている可能性が考えられる。もしそうだとすれば、自傷行為に対して誤った考えを修正し、正しい理解を促進するための研修が行われているように、自殺・自死についても、そういったことを念頭においた研修を実施する必要があるように思われる。ちなみに Hawton, Rodham & Evans (2006 松本・河西 監訳, 2008) は、自傷行為を行う多くの人は、「1人きりの状況で行われ、周囲の誰にも告白されない傾向がある」ことを示し、エビデンスにもとづいて自傷行為の演技的・操作的な意味合いを否定し、むしろ孤独な対処方法であることを強調している。「死にたい」も、決して演技的・操作的なものではなく、それを口にすることで他者に本人の苦しさの一端を伝

えているものであることを、自傷行為同様に、エビデンスでもって説明をしていく必要があると考えられる。

また、今回のアンケート回答からは、「死にたい」と言う人がメンタルヘルスの問題を有していると想像した学生は全体からみると決して多くなかった。このことが影響しているのか判断は慎重でありたいが、アンケートの回答の中で、「死にたい」と言う人に対する対応に、病院や地域のメンタルヘルスの相談ができる機関へつなぐといった回答をほとんど見ることができなかつた。自殺・自死の問題とメンタルヘルスとの関連、とりわけうつ病との関連にもとづく普及啓発活動は、これまでの自殺予防対策の中で力を入れてきた部分であるが、そうした認識はまだ一般に広く行き届いていないと思われる。もちろん、すべてをメンタルヘルスの問題と関連付けることはできないが、自殺・自死に迫り込まれる背景として、メンタルヘルスの問題を適切に伝え、そのための専門家との連携の必要性について、啓発活動を行う必要があるだろう。

### 3. 教師志望の学生に対するアプローチ

本稿では、教師を志望する学生の自殺・自死に対する考え方に焦点を当ててきた。アンケートの回答からは、自殺・自死に対する偏向した認識が存在している可能性が示唆された。アンケートの回答やそれに対する考察はいささか精緻に欠ため、今後より精査が必要であるが、少なくとも、自殺

対策基本法や自殺総合対策大綱にあるような学校での自殺予防対策（とりわけ SOS の出し方教育）を導入、推進することを念頭におくと、現場に出る前の教員志望の大学生に対する自殺予防対策に関する研修等は有効であると考えられる。現在、教員志望の大学生を対象とした、そうした研修に関する実践や研究報告は限られたものとなっている。今後そうした取り組みを行うことで、将来的に教育現場での自殺予防対策の推進に寄与できるはずである。

#### 引用文献

厚生労働省（2013）．ゲートキーパー養成研修用テキスト（Retrieved from <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000128774.html>）（閲覧日：2018年5月29日）

松本俊彦（2012）自傷行為の理解と援助  
精神神経学雑誌，114，983–989.

Hawton, K., Rodham, K., & Evans, E (2006). *By Their Own Young Hand: Deliberate Self-harm and Suicidal Ideas in Adolescents*. Jessica Kingsley Publisher, London (松本俊彦・河西千秋（監訳）（2008）自傷と自殺—思春期における予防と介入の手引き 金剛出版)